

研究課題	新型コロナウイルス流行下における大学生の交流と心理的適応に関する 短期的縦断研究		
氏名	品田 瑞穂	所属	学校心理教室
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）			
<p>本研究は、新型コロナウイルス流行下において他者との対面の機会を制約された状況にある大学生の心理的健康・発達について検討し、授業内外においてどのような交流の機会を持つことが心理的適応において効果的であるかを明らかにすることを目的とする。この目的のため、本研究では同一の調査対象者に対して2時点にわたり継続的に質問紙調査を実施し、個人特性と交流経験の頻度および内容が、心理的健康・発達の変化に及ぼす影響を分析した。</p> <p>本研究の調査は、回答者の負担を減らすため3つのパートに分割して実施した。第1部では、心理的適応の指標として居場所感（役割を持ち、他者から受け入れられており、自分らしくいられるという感覚）に焦点を当て、65名の大学生に対して春学期の2時点（5月から8月の間）で調査票に回答を求めた。第2部では、心理的適応の指標としてアイデンティティの発達に焦点を当て、96名の大学生に対して同様に春学期の2時点で回答を求めた。第3部では、第1部・第2部で得られた結論の一般化可能性を高めるため、402名の大学生に対して質問紙調査を実施した。</p> <p>3つの調査を通して、大学生の授業内外における友人との交流経験が心理的適応に及ぼす影響を検討した。第1部・第3部では、交流経験として、授業内外での雑談や辛さを打ち明けるといった「インフォーマル場面での親和的な交流経験（以下、親和経験）」、授業内での役割分担や共に課題に取り組むといった「フォーマル場面での協力的な交流経験（以下、交流経験）」の2種類を測定した。第2部では、より私的な場面での交流経験として、同じ趣味を持つ仲間との交流（ファン活動）を測定した。第1部の分析結果からは、居場所感の1つである本来感の変化に対して、親和経験が正の効果を持つことが示された。すなわち、インフォーマル場面での友人との交流が、「自分らしくいられる」という感覚を高めることが示唆された。親和経験と本来感の正の関連は、第3部の調査においても確認された。一方、授業内の交流経験である協力経験は、心理的適応と関連を持たなかった。このことから、授業内でのアクティブ・ラーニングなどの課題は、探究心や理解度を深める可能性はあるが、心理的適応には寄与しないと考えられる。加えて、履修中の授業の中で遠隔授業が占める割合は、親和経験・協力経験のいずれとも負の関連があり、遠隔授業が相対的に多いほど、交流経験が少ないことが示された。ただし、遠隔授業の割合は、心理的適応（居場所感）とは関連がなかった。また、第2部の分析結果からは、趣味仲間との交流経験はアイデンティティの発達には影響しないことが示された。これらの結果から、悩みを打ち明ける、励まし合うといったインフォーマル場面での交流の場を設けることが大学生の心理的適応を高める上で重要であることが示唆された。</p> <p>留意点として、本研究では遠隔授業の割合と心理的適応に関連がみられなかったものの、2021年度の春学期にデータ収集を行ったため、遠隔授業の割合は6・9割と高くなっていた。このため、個人間の分散が少なく、相関を検出しにくかった可能性がある。遠隔授業の割合は、研究1・2を通して交流経験と有意な負の関連があった。したがって遠隔授業によって交流経験が減少し、居場所感が抑制される可能性は残されている。また、本研究では遠隔授業の種類（双方向のライブ授業やオンデマンド授業など）を区別せずに測定していたが、先行研究では特にオンデマンド授業の負担感と精神的健康の関連が指摘されている。遠隔授業のより詳細な分類によって、心理的適応との関連がみられる可能性がある。</p>			
【研究成果発表方法】			
<p>現在、研究成果の一部をとりまとめ、査読付学術誌「心理学研究」に投稿中です。</p> <p>表題：大学生の居場所感と交流経験との関連の検討</p> <p>著者：品田瑞穂・水越早紀・高橋友晴</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。